

## 血漿交換が SLE 治療経過中の TTP に

### 有効であった一例

中山 英・荒井秀典・片岡 宏・長谷川吉昭  
堀内久徳・石井賢二・北 徹・土井俊夫  
京都大学老年科

症例、56 才女性。平成 10 年 9 月、高血圧を指摘され、11 月より尿量減少、下腿浮腫、蛋白尿を認めた。12 月に全身倦怠感が強くなり、汎血球減少をきたしたため当科入院となった。入院時、抗核抗体陽性、C3、C4、補体価の減少を認め、蛋白尿、血尿を認めた。腎生検の組織病型はびまん性増殖性腎炎型を示した。以上よりループス腎炎を合併した SLE の診断にてステロイドパルス療法を開始した。3 回日のステロイドパルス療法直後、38°C 台の熱発があり、腹部びまん性点状出血斑を認めた。その翌日には、肉眼的血尿、血小板減少、CRP 上昇をきたし、血・便・尿より *Salmonella enteritidis* を検出したため、菌血症をきっかけとする TTP と考え、血漿交換療法を開始した。*Salmonella* 感染に対しセフトキシムを使用した。その後、感染徴候は改善し、補体価も上昇し、SLE の活動性は著明に改善した。今回は、基礎疾患として SLE ループス腎炎があり、ステロイド治療中サルモネラ菌血症となり、またそれにより誘発された TTP を迅速な血漿交換で救命しえた一例として報告する。

## ネフローゼ症候群に対するリンパ球除去療法の検討

清水美保\*1・久田幸正\*1・古市賢吾\*1  
和田隆志\*1・高桑 浩\*1・伊勢拓之\*1,\*2  
横山 仁\*1,\*2・小林健一\*1,\*2  
金沢大学第 1 内科\*1、同血液浄化療法部\*2

目的：T リンパ球由来の糸球体透過性亢進因子の関与が指摘されているネフローゼ症候群に対しリンパ球除去療法 (LA) を試み、その効果を検討した。

方法：微小変化型ネフローゼ症候群 (MCNS) 2 例、巣状糸球体硬化症 (FGS) 2 例、膜性腎症 (MN) 1 例に対し、Cellsorba (旭メディカル) を用いて LA を施行した。

結果：本療法により、症例 1 (MCNS)、症例 2 (MCNS) および症例 3 (FGS) の活性化 T 細胞数は有意に減少し、1 日尿蛋白は平均 9.9 g より 4.3 g へと減少した。その後、免疫抑制療法を追加することにより蛋白尿は 2.0 g/日以下へ更に改善した。一方、症例 4 (FGS) ならびに症例 5 (MN) では蛋白尿の

改善はみられず、免疫抑制療法にも抵抗性を示した。

結論：LA に対する反応性が病態の相異を反映し、免疫抑制療法に対する反応性ならびに疾患予後と関連する可能性が考えられた。

## MCTD の経過中、中枢神経症状および肺胞出血の SLE 様症状出現に対して、免疫吸着療法が著効した 1 症例

林 正則\*1・丹尾多希\*1・中川潤一\*1・豊岡重剛\*1  
高山吉弘\*2

福井赤十字病院内科\*1、同神経内科\*2

患者は 22 歳女性。

現病歴：1997 年 5 月 (21 歳) レイノー症状、手指の腫脹、筋力低下、多関節痛、抗 RNP 抗体陽性、CPK 上昇を認め MCTD と診断され、PSL 40 mg/day から治療を開始し、10 mg/day で外来通院中であつた。1998 年 6 月 6 日頃より記憶力の低下、失見当識、痙攣発作などの中枢神経症状が出現したため当科に入院した。

経過および検査成績：第 3 病日よりステロイドパルス療法 (メチルプレドニゾン 1 g/day) を 3 日間行なったが、第 14 病日より血痰と呼吸困難が出現したため、肺胞出血と診断し免疫吸着療法を 4 回施行した。血清学的検査ではリウマチ因子 80 倍、抗核抗体 2560 倍 (speckled pattern)、ds-DNA 抗体 880 U/ml、抗 RNP 抗体 134.3、ループス AC 300 以上、C3、C4、CH 50 の低下を認め、SLE 様であつた。免疫吸着療法後、中枢神経症状、呼吸器症状の消失を認め、血清学的にも ds-DNA 抗体、ループス AC の著明な低下と CH 50 の上昇を認めた。

結論：免疫吸着療法が有効であつた。

## 血液透析濾過を行った IgD 型骨髄腫の 1 例

長船健二\*1・竹岡浩也\*1・金森弘志\*1・三村六郎\*2  
金津和郎\*1

兵庫県立尼崎病院腎臓内科\*1、同病理部\*2

骨髄腫腎を初め多発性骨髄腫に伴う腎病変は主に免疫グロブリン light chain の腎毒性によって引き起こされ、骨髄腫に伴う腎不全の治療における血漿交換 (PE) の有効性が報告されている (Zucchelli, P. Kidney Int, 1988; 33: 1175)。しかし、PE 以外の血液浄化法による light chain 除去に関する報告は腹膜透析のみである (Russell, JA. Br Med J, 1978; 2: 1397)。今回、我々は IgD 型骨髄腫の 1 例において血

液透析濾過 (HDF) による light chain の除去量を測定し PE と比較した。症例は 63 歳男性。急性腎不全、急性心不全にて入院し血液透析を導入、IgD- $\lambda$  型骨髄腫と確定したが化学療法を拒否し 1 ヶ月後に死去した。

剖検腎組織は骨髄腫腎による急性腎不全に一致する所見であった。経過中 PE で 1 回、HDF で 2 回、廃液中の free light chain を測定した。骨髄腫の治療における HDF の可能性について検討する。